

社会学のすすめ

滋賀大生への遺言

永田えり子

Eriko Nagata

滋賀大学 経済学部 / 教授

滋賀大を去るにあたって皆さんに伝えたいのは、社会学的視点を活用してほしい、ということです。何の役に立つかわからない。なにかのプロになれるわけではない。けれどその発想は、ものごとの理解を助け、さらなる発想の源になりうる。思考のためのツールを与えてくれるのです。

【異文化・自文化理解】

たとえば「プロ倫」。プロテスタンティズムが資本主義発達の原動力になったことがわかったとして、それが実生活に何の役に立つでしょうか。まず立ちませんね。トイレの詰まりを直せるほうが、ずっと役に立つでしょう。

それでも、ここには発見や驚きを禁じざるをえませんし、続けて様々な興味を触発します。一見全く無関係なプロテスタンティズムと経済の仕組みに強い関係があるなら、仏教はどうだろうか、儒教は？日本の宗教的伝統は資本主義に適合的なのかそうでないのか？

宗教社会学の専門家にならなくても、調べてみたり、宗教関係の事件の折にふりかえってみたり、考えてみたりするようになる。そうして宗教に関して頭の中に地図が出来上がっていく。それぞれに特徴的な考え方、ものの見方、行動様式。それはどんな事件にどのように反応するかも教えてくれる。自文化、異文化への理解が深まります。それはアラビア語が喋れるといったように「直接」役に立たなくても、自他理解のための枠組みを与えてくれるのです。

【知ることと理解すること】

異文化との摩擦を避けるだけなら「知識」で十分かもしれない。旅行のためのマニュアルにそうしたことはたくさん書いてあるでしょう。しかしそれは「摩擦を避ける方法を知っている」ということで、「文化を理解した」ということではないかもしれない。

摩擦を避けるだけなら、たとえばイスラム圏の食物規範についてなら、「豚と酒」について知っていれば十分かもしれない。

「イスラム教では豚を食べてはいけない」ことは多くの方がご存じだと思います。では、それはなぜでしょうか？ 答えはもちろん、コーランにそう書いてあるから。ではなぜコーランに書かれていたら守らなければならないのでしょうか？ こう考えていくと、イスラム教の特徴とか、その考え方下での社会規範のあり方が理解できる。食べ物のことでも「応用が利く」わけです。

あなたが誰かを理解するとき、その人ならこういう時どう考えるか、なんていうだろうか、類推できるかと思います。「○○君ならきっとこういうよ」と。社会もそれと同じです。理解によってこそ、「境遇の想像上の交換」も可能になる。人の立場に立ってものを考えることができる。消費者なら、銀行なら、ウクライナの人々なら、震災の被害者なら、どう思うだろうかと考えることは、一市民としても、関連する仕事にとっても重要でしょう。

【メタに立つ】

「もし自分がこれこれの立場だったら」どう考えるだろうか。これを「境遇の想像上の交換」といいます。正義論のJ.ロールズ概念です。もしも自分が最底辺の立場に置かれるなら、どんな社会を選ぶだろうか、という思考実験によって、リベラルな社会を正当化しようとしたものです。

日常、こうした視点に立つことはまずありません。今晚のおかずについて考えているときに、もし自分が飢えていたらとか、世界の飢餓をどうやって解消しようかとか考えないし、試験勉強しているときに、そもそも理想的な大学制度とはいかなるものかとか考えない。日常は個人的な利害や関心とか、試験勉強、クラブの練習やバイトなど、所属している

組織の役割を果たすことで埋めつくされているかと思います。

こうした視点を内属的視点とか内的視点とかいいます。ゲームのルールを所与として、そのなかで「ゲームに勝つ」ことを目指す視点ですね。

一方、「これはどのようなゲームなんだろうか」と、ゲームの外からゲームを分析する視点を外的視点といいます。

このような「外的視点」を社会学は要求します。自分の所属しているこの社会から一步離れて、この社会のゲームのルールを明らかにしていく作業が社会学することです。

かつてライト・ミルズが言った「社会学的想像力」。それを引用してギデンスは一杯のコーヒーから社会学ができるといいました。対象はなんでもいい。それにまつわる人々の動きや制度をみて、それがどういうゲームなのかを考えるなら、それはすでに社会学です。

ゲームをプレイすることで忙しいのはわかっています。けど時には立ち止まって、自分という立場を離れて、ものごとを見てみてください。それがむしろ新しい発想を生み、社会や世界を変えてゆくことにつながるかもしれないのです。

【理解という快楽】

あなたが友人を理解するのは、「それが何かの役に立つ」からではないと思います。理解しあうことそのものが交際であり楽しみなのではないでしょうか。そして対象が何であれ、「なるほど、そういうことだったのか」と納得する瞬間、対象を「掴んだ」り、「一体化した」気持ちにならないでしょうか。それは、所有とはまた別の、何かを「手に入れる」瞬間です。みなさんが「理解による世界征服」の進展によって、充実した生を送ることを祈念しつつ、お別れの言葉とさせていただきます。